

# 後継牛の育成を核とした酪農経営 ～理想とする乳用牛を求めて～

豊田市 杉浦 弘泰さん  
畜産（酪農）

【平成 26 年 10 月 20 日掲載】

乳用牛の改良に尽くされ、全国や地域で開催されるホルスタイン共進会で数々の好成績をおさめてきた杉浦弘泰さんを紹介합니다。現在は、豊田市で後継者の耕平さんとともに酪農経営を行う一方で、愛知県酪農農業協同組合組合長、東海酪農農業協同組合連合会会長、（社）日本ホルスタイン登録協会副会長として、愛知県及び全国の酪農発展に向けて尽力されています。

## 無類の牛好き

大正時代から続く牧場の次男として生まれた杉浦さんは、物心つく頃から牛と接してきました。「学校のテスト中も牛のことばかり考えていた。」と語る杉浦さんは、自他ともに認める牛好きで、当時の友人からは「将来は牛と結婚するのではないか」と言われていたそうです。

高校は地域の進学校に通っていましたが、夏休みは北海道の牧場でアルバイトをするなど、まさに牛漬けの青春を送っていました。そして、高校卒業後の昭和 40 年に 10 歳離れた兄と父親が経営する牧場に就農します。



杉浦 弘泰さん

## 兄と歩んだ青年期

就農後、杉浦さんに牛の見方や飼養技術等、多くを教えてくれたのが兄の祐幸さんでした。また、杉浦さんが高校卒業直後には、後学のためにと福島県で開催された第 4 回全国ホルスタイン共進会への参加を後押ししてくれたそうです。「当時は、兄貴も就農後間もない頃で、自らも行きたい気持ちはあったと思う。本当に感謝している。」と語ってくれました。共進会に初めて参加した杉浦さんは、全国の代表として出品される牛達を前に「いつかは、自分もこの場所で頂点に立ちたい」と就農への気持ちを新たにしました。

就農後は、アメリカで乳用牛の改良を学んだ祐幸氏とともに、北海道を含め全国の育成牧場を巡り、優良な母牛の導入を進めます。時には高級車が購入できる価格の母牛を購入しました。昭和 62 年には、2 人で育成した牛が中部日本ホルスタイン共進会でグランプリを受賞するなど乳用牛の改良においてその名を知られる存在となります。

その頃から徐々に独立を意識するようになり、杉浦さんは、平成 3 年に分家をし、自らの牧場である「杉浦牧場」を開場します。借金をして建設した 30 頭飼いの牛舎に急遽買い付けた牛と兄から譲ってもらった牛を合わせた 24 頭を導入してのスタートでした。



杉浦牧場の事務所に並べられた共進会のトロフィー

## 個々の牛にあわせた飼養管理

牧場を開場した当時は給餌場と牛床（牛の寝床・休息場所）が分離したフリーストール牛舎の普及が進んでいましたが、個々の牛にあわせた飼養管理が必要だと考える杉浦さんは、あえてつなぎ牛舎を建設しました。さらに、つなぎ牛舎のデメリットに挙げられる牛の運動不足解消のために、牛舎横には放牧地も設けました。

「生活は苦しかったけど、自分の牛を持てたことが嬉しくて朝が待ち遠しかった。」と語る杉浦さんは、どんなに忙しくても牛へのブラッシングを欠かしたことはありません。現在の酪農経営において毎日行う人は少ないですが、直接牛に触れることで異常にもいち早く気づくことができるそうです。



牛舎横に広がる放牧地

## 目指す牛の姿

開場から3～4年は経営的に厳しかったこともあり、杉浦さんは「とにかく乳量を増やそう」と濃厚飼料の割合を高めたり、多回給餌にも挑戦しました。その結果、平成8年前後には1頭あたり10,000kgの年間乳量を達成しました。しかし、牛自体の消耗も激しく、供用年数（乳牛を生産に利用している年数）は年々短くなっていました。廃用牛の増加に伴う初任牛の導入及び後継牛の育成に係る経費を考慮すると経営的にはプラスにならないと考えた杉浦さんは、生涯乳量の多い長寿連産型の乳牛育成を目指すようになります。丈夫な体躯を重視した結果、乳量自体は一時的に低下しましたが、供用年数は長くなったそうです。

現在、後継牛の自家育成は、人工授精師の資格を持つ息子の耕平さんに任せており、インターネットを活用してアメリカやカナダ産の優良精液を導入しています。乳量自体も年々増加しており、杉浦さん自身が考える理想の牛（＝バランスの取れた体躯と高乳量の両立）に近づきつつあるそうです。「いつか理想の牛ができれば、その牛と一緒に寝て過ごすのが夢」と笑いながら語ってくれました。

## 将来に向けて後継牛の確保を

杉浦牧場では、40頭の経産牛と23頭の未經産牛がおり、今後生乳生産量の増加が見込まれています。一方、愛知県全体の生乳生産量は昨年1年間だけでも、7,000t程落ち込んでいます。

愛知県酪農農業協同組合（以下、県酪）の会長として杉浦さんは、「この原因は購入飼料の高騰により、酪農家の廃業が相次いだこと。初任牛の価格高騰により、初任牛が購入できず、現在の酪農家の牛舎の稼働率が、県内全戸で7割程度であることだと思う。」と生乳生産量減少の原因を教えてくださいました。「現状を打開するためには、後継牛を増やすことが重要で、判別精液（雌雄を判別した精液）を用いた優良後継牛の確保や、初任牛の購入の支援に向けた取組を県酪でも推進していく。」と愛知県の酪農業界の発展に向けた具体策を語っていただきました。



杉浦牧場の後継牛

執筆：農業経営課

取材協力：豊田加茂農林水産事務所農業改良普及課